



特別支援学級における授業づくり



今持っている力を最大限に発揮して
自ら伸びようとする子どもの育成のために



特別支援学級の担任として
今日もがんばるぞ！

子どもが学ぶことの楽しさや喜びを
実感することができる授業をしたい。
子どもの「できた」「わかった」を
実現することができる授業をしたい。

そのためには、どんなことをすれば
いいのだろう？
実際に授業づくりを進めるとなると、
次から次へと
知りたいことが生まれてきます。

子どもの学びを保障し、
確実に力を付けていくことは
わたしたち教師の使命です。

授業づくりについて考える際の
手がかりとして、
「自分の学級の子どもだったら…」と
子どもの姿を思い描きながら、
本リーフレットを
活用していただければと思います。





特別支援学級における授業づくり

今持っている力を最大限に発揮して
自ら伸びようとする子どもの育成のために

もくじ

- 1 . 特別支援学級で学ぶことのよさは、どのようなことでしょうか? P.1
- 2 . 特別支援学級担任は、授業づくりでどのようなことに困っているのでしょうか? . . P.2
- 3 . 特別支援学級に求められている授業とは、どのような授業なのでしょう? P.3
- 4 . よりよい授業づくりのためには、どのように子どもの実態把握をすればよいのでしょうか? P.5
- 5 . 子どもが身に付けなければならない力を確実に身に付け、主体的に学ぶ授業とはどのような授業なのでしょう?

実践例 国 語 小学校知的障がい学級 P.6
実践例 算 数 小学校知的障がい学級 P.8
実践例 算 数 小学校知的障がい学級 P.10
実践例 学級活動(2) 中学校知的障がい学級 P.12
- 6 . 交流及び共同学習のねらいとポイントは、どのようなことでしょうか? P.14
- 7 . 特別支援学級の授業づくりを推進する校内体制の整備として、
どのようなことが必要なのでしょう? P.15
- 8 . 授業づくりで困った時は、どこに、どのように相談すればよいのでしょうか? . . . P.16
- 9 . 特別支援学級担任の先生へのメッセージ P.17
引用・参考文献



1. 特別支援学級で学ぶことのよさは、どのようなことでしょうか？

一人一人の教育的ニーズに応じた「オーダーメイドの授業」により、子ども自身が、今持っている力を最大限に伸ばすことです。

一人一人の ニーズに 応じた教育

自分が持つ力を十分に伸ばす

障がいのある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立って、一人一人の教育的ニーズを把握し、生活や学習上の困難を改善又は克服するための、適切な指導及び必要な支援を行います。



一人一人が意欲的に活躍する



子どもに合った教育内容を設定することで、子どもが本来持っている力を発揮できるようしたり、可能性を引き出したりすることができます。このことは、障がいの有無やその他の個々の違いを認識し、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となります。

共生社会の 基礎となる 教育

生きる力を はぐくむ教育

主体的に思考・判断・行動する

子どもは、「できるようになりたい」「分かるようになりたい」と思っています。自ら課題を見付け、学び、考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」をはぐくみます。



教育基本法第4条には、全ての子どもたちに対する教育の機会均等として「すべて国民は、ひとしく、その能力に応じた教育を受ける機会を与えられなければならない。人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によって、教育上差別されない。」と明記されています。これを受けて平成19年4月の「学校教育法の一部改正」において特別支援教育が本格的に開始され、文部科学省から「特別支援教育の推進」についての基本理念が示されました。

障がいがあることで、本来子ども自身が持っている能力を最大限に伸ばすことが困難な子どもについては、個々の障がいの種類・程度に応じ、特別な配慮のもとに適切な教育が行われなければなりません。

学びを支える教師もまた、子どもの姿に学び、共に成長していく存在であり続けたいものです。





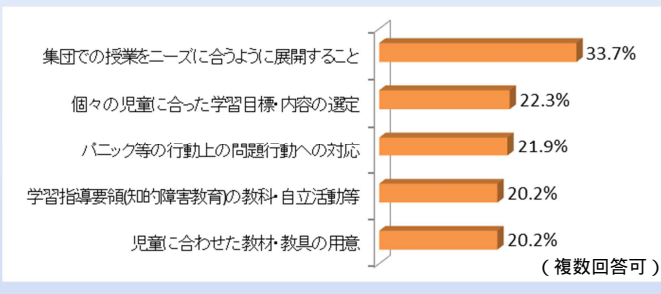
2 . 特別支援学級担任は、授業づくりでどのようなことに困っているのでしょうか？

子どもが過ごす一日の学校生活において、中心となるのは授業です。特別支援学級では、子どもの自立や社会参加の基盤をはぐくむために、一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を様々な工夫しながら授業づくりが進められています。しかし、特別支援学級には通常の学級とは異なる困難さや課題もあります。

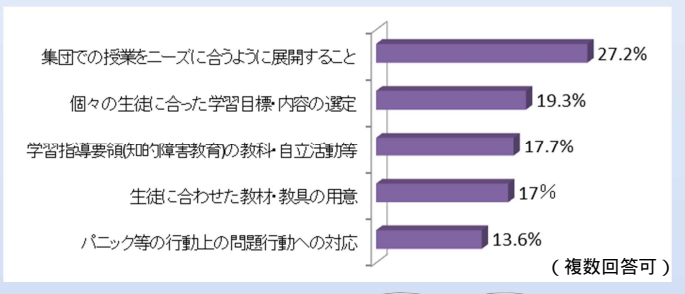
国立特別支援教育総合研究所

「知的障害特別支援学級(小・中)の担任が指導上抱える困難やその対応策に関する全国調査(平成 24 年度～25 年度)」より

教育課程や指導に関して困っていること(小学校)



教育課程や指導に関して困っていること(中学校)



どんな授業をすれば、子どもがもっと主体的に学ぶのだろう。

授業づくり P.3、4、6～13

実態把握の大切さは分かっているけれど、何からどんなことを見取ればよいのかよく分からない。

実態把握 P.5

子どもに合った学習内容や指導・支援の方法を見付けたい。

実態把握 P.5

授業づくり P.3、4、6～13

子どもが安心して学ぶことができる学習環境にするためのポイントは何だろう。

環境整備 P.5

交流学級で学ぶことには、どのような効果があるのだろう。

交流及び共同学習 P.14

授業を組み立ててはみたものの、本当にこれでよいのか自信がない。

校内体制 P.15

授業づくりで困った時に、誰に相談したらいいのだろう。

校内体制 P.15

センター的機能の活用 P.16



本リーフレットでは、特別支援学級における授業づくりのポイントをまとめています。各校での授業づくりの参考にさせていただけたらと思います。



3. 特別支援学級に求められている授業とは、どのような授業なのでしょう？

- 子どもが身に付けなければならない力を確実に身に付けることができる授業
- 子どもが主体的に学ぶ授業

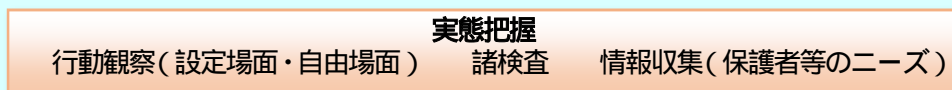
一言で言えば、『子どもの学びを保障し、生涯学び続ける力を子ども自らが獲得できる状況づくりがなされている授業』ということになります。子どもには、多様なニーズがあります。そして、授業の主人公として、自分の能力を発揮したいと思っています。授業はそのような子どもの願いを実現するための場であると言えます。

「子どもが身に付けなければならない力を確実に身に付けることができる授業づくり」のための4つのポイント

的確な実態把握を行うこと

個に応じた指導を行うためには、個々の子どもの障がいの状態及び発達段階や特性等を的確に把握することが、極めて大切です。個に応じた指導は、教師が的確に子どもの実態把握をすることから始まります。

実態把握の方法としては、行動観察法、情報収集法、検査法等がありますが、それぞれの方法の特徴を十分に踏まえながら実施し、総合的に解釈することが大切です。また、実態の変化に応じて、定期的な見直しを行う必要があります。



情報の整理(検査結果の解釈・優先課題の明確化等)

子どものよさ(得意なところ、強いところ、潜在性)や認知・行動の特性を捉える
○子どもの課題(改善したいところ、伸ばしたいところ、苦手なところ等)を捉える

個別の指導計画等の作成(目標・内容の検討・決定)

教育的ニーズや実態に即した指導や授業の展開

全体的な児童生徒の実態把握と合わせて、これから行う授業に関する実態を丁寧に把握することが、的確な目標設定につながります。



適切な目標設定を行うこと

年間指導計画、単元の指導計画、本時の指導が連動している。
目標が単元の指導計画と連動している。
目標を具体的に設定し、評価できる指標が含まれている。
指導内容・目標などの指導課題が、個別的・具体的で分かりやすい。
目標は観点のバランスがとれたものとなっている。
教師同士で目標について共通理解している。

目標の設定については、その単元、その時間で達成可能な具体的で分かりやすい表記を心がけていくことが大切です。具体的に表記することで、達成状況を明確にし、次の目標を的確に設定していくことができます。

評価システムが構築されていること

適切な評価規準が設定されている。
評価場面、評価方法が指導案に明記され、目標を達成した姿が具体的にイメージされている。
振り返りシート等、評価するシステムを導入し、授業の改善に結び付けている。

教材・教具の工夫を意識すること

障がいのある子どもが自主的・主体的に学習に取り組み、学習内容を確実に身に付けるためには、障がいの状態や特性に応じて教材・教具を適切に活用することが重要です。そのためには、教師が教材・教具について絶えず研究するとともに、これらの整備に努める必要があります。

また、市販の教材・教具を利用して学習効果が上がらなかったり、子どもの実態に合わないために使用することが難しかったりする場合があります。このような場合、教材・教具を改良する、または新たに開発する等、子どもの求めに合うような工夫をする必要があります。

「子どもが主体的に学ぶ授業づくり」のための8つのポイント

一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を行うこと

実践例 P.8,9

実践例 P.12,13

個別の指導計画は、一人一人の自立や社会参加を目指し、組織的な体制のもとで、個の教育的ニーズに応じた教育活動を学校全体で展開するための根拠と道筋を示すものです。まずは、個別の指導計画の作成を通して、子どもの「学び方」や教師の「教え方」について共通理解を図ることが必要です。

また、授業における「個のニーズに応じた支援」は、主として教師による個別的支援によってなされますが、人に頼った支援だけでは、子どもの自立的・主体的な活動をはくむことは期待できません。「困っているだろう」といって、不必要にたくさんの援助をすれば、本人の意欲や本人から支援を求めるチャンスを奪っていくことにつながり、自信も育ちにくくなってしまいます。将来、社会の中で働いていくことを念頭にいた指導や支援が必要です。



学習課題を明確にすること

実践例 P.6,7

学習課題をはっきりと示し、何を学ぶ時間なのかを明確にします。また、学習課題や学習内容等をシートにまとめ、支援が必要な子どもが自分で確認できるように示す工夫も必要です。子ども自身が授業の中で何を体験しているのか、何を学んでいるのかが分かるように授業を展開することが大切です。

見通しをもって活動できるようにすること

実践例 P.10,11

必要な場合には、考える視点や道筋、方法を文字や写真で示す等、子どもが、いつ、どこで、どの順番に何をするのか分かり、見通しをもって活動に参加できるようにします。

振り返りの場を設定すること

実践例 P.8,9

実践例 P.12,13

学習した内容が明確になるように、子どもが確認したり、振り返ったりする場を設定します。また、「できたか」「できなかったか」を子ども自身が分かるような教材づくりが大切です。

自己選択、自己決定できる場を設定すること

実践例 P.12,13

「主体性」とは、自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動しようとする態度です。このような態度をはくむためには、自分で判断ができ、責任をもって自ら行動することができるような授業づくりが必要です。

授業のねらいにそった物理的環境を整えること

実践例 P.8,9

障がいのある子どもは、「できない子ども」ではなく「できない状況におかれがちな子ども」であり、「できる状況」をつくることで、どの子どもも、持っている力と自分らしさを発揮できるようになるとされています。学びに困難のある子どもに対する授業づくりでは、理解しやすく学びやすい、そして、動いて活動に取り組みやすい環境づくりを行うことが必要です。学習環境を整えることで、子どもの自立的・主体的な取組が促進されるとともに、子どもと教師の無駄のない効率的な動線が生み出されます。

- ・ 子ども自ら準備や片付けをし、課題や活動に取り組みやすいように机や椅子を配置すること
- ・ いつ、どこで、どの順番に、何をするのかがよく分かるような手がかりを環境の中に配置すること
- ・ どこに、何があるのかがよく分かるように、教材・教具等を配置すること
- ・ 適切な指導や支援をしやすいような教師の立ち位置を決めること 等

学ぶ機会、学び合う機会を増やすこと

実践例 P.10,11

学びに困難のある子どもにとって大切なことは、できるだけ学びの機会に触れさせ、それを繰り返し重ねることです。できる限り「待つ機会」や「待つ時間」を減らし、同時に連続して活動することや、並行して活動を行えるように展開を考えることが必要です。また、人間関係の形成や社会性をはくむには、教師や友だちと学び合う機会を豊富に設けることも必要です。「人とのやりとり」を通して、「要求」「確認」「報告」「許可」など、その場や年齢にふさわしい様々な対人的技能や社会的技能をはくむことができます。

子どもの主体性を引き出していく学習では、教師が一方的にやり方を話すのではなく、子どもの意見を聞きながら、教師の考えも同時に伝えていくという応答関係を繰り返し、心理的な「きずな」を深めていくことが大切です。主体的な学習とは、「教える」ことではなく「気付かせる」指導であると言えます。

多様・多重な評価に努めること

実践例 P.6,7

子どもの主体的な学びを生み出すためには、学びの機会ごとに、成果や結果から達成感や成就感、満足感といった価値観を子ども自身が抱くことができるようにすることが大切です。そのためには、授業展開で行う様々な活動ごとに「結果」に気付くことができるような評価の機会が必要です。しかし、学びに困難のある子どもは、その評価の意味を理解することが難しく、そこに価値を感じにくいことがあります。そこで、子どもが評価の意味を理解できるよう、「他者評価」「自己評価」「相互評価」等の『多様な評価』と、それを繰り返し重ねる『多重な評価』を行うことが大切です。



4. よりよい授業づくりのためには、どのように子どもの実態把握をすればよいのでしょうか？

実態把握 これまでの学習の履歴から、指導や支援の工夫の手がかりを探る

各教科等の「年間指導計画」及び「個別の指導計画」

これまでの子どもの学びと教師の指導の様子がまとめられた大切な資料です。特に、これから授業を行う単元（題材）と同じ内容や領域の記録は必ず確かめ、系統的・段階的な学習となるようにします。

- どこまでできているのか
- どこにつまずきや難しさがあったのか
- どのような場面で、どのような支援を必要としたのか
- どのような支援が有効であったのか

各教科等の個別の指導計画

「特別支援学級担任のための手引 第2号」
(平成23年1月鳥取県教育委員会) P.40より

記録された具体的な支援内容や方法、学習評価を確認することで、これから計画をしている学習の単元（題材）目標や指導内容が、子どもにとって高すぎたり、低すぎたりはしないかを確認することができます。

昨年度の使用教材、テスト・ノート等の記録

どこまで学習しているのか、つまずいているところはどこなのかを具体的な子どもの姿から把握します。例えば、ノートの記述からは、1単位時間でできる作業の量や集中が継続する時間が見えてきます。また、よくできていることは、子どもの得意な力・強みと捉えて、これからの学習の中で発揮できるようにします。

他の教職員からの情報を集める

前担任や教科担任、かかわりのあった教職員から、これまでの学習の様子を聞きます。様々な場での有効なかかわり方や支援の方法など、記録には書ききれなかった細かな情報から、具体的な手立てが見えてきます。

実態把握 日常の子どもの姿から、学習する内容にかかわる実態を見取る

日頃から、学習する内容にかかわる子どもの実態の把握を意識的に行いましょう。

また、単元（題材）によっては、子どもの実態に合わせて学習に関連した活動を行うことや、本人や家族から情報を得ておくことも効果的です。

事前におききたい子どもの実態

《例》中学校・技術家庭【家庭分野の調理実習】

- ・調理に対する興味・関心や経験はどの程度なのか。
- ・調理機器や器具の扱いに関する理解や技能はどの程度なのか。
- ・日常生活における衛生にかかわる習慣や、基礎的・基本的な知識は身に付いているのか。 等

《例》小学校（中学年）・体育【ゴール型ゲーム】

- ・ボール操作の技能はどの程度なのか。
- ・シュートゲーム等の規則に関する理解はどの程度なのか。 等

実態把握に基づいて、適切な学習環境を整備する

学習に集中できる教室づくり・刺激量の調整

- * 学習スペースの前面をすっきりさせる。
- * 刺激となるものはカーテン等で覆う。
- * 集中し、力を発揮できるような机の配置を工夫する。(実態に合わせて教室を目的別に区切る。)
- * 個別学習スペースを作る。
- * 危険な道具をしまう。

教材・教具の工夫

- * 子どもの興味・関心や注意を引く。
- * 発達段階及び生活年齢に合っている。
- * 「できた」という達成感・成就感が味わえる。
- * 「もっとやりたい」という意欲が高まる。
- * 使いたい時に自由に使い、扱いやすく壊れにくいもので、繰り返し試行することができる。

学習に必要なものを自分で準備・片付けることができる工夫

- * 何を、どこに、どのように置くのか、場所を決め、視覚的に示す。
 - ・ラベルを貼る
 - ・見本写真を示す
 - ・かごを置く
- * 日常よく使用する個人の道具等は、かごや袋、カバンにまとめておく。

学習の手順が分かり、見通しをもって、主体的に行動できる工夫

- * 単元の学習の流れやスケジュールを表等に整理して提示する。
- * 本時の学習の流れや、今取り組んでいる活動を示す。
- * 終わる時間の目安や、終わった後の活動を示す。

5 . 実践例 国語 小学校知的障がい学級

- 1 単元名 『虫ってすごいぞBook』を作り、1年生に伝えよう ~文章の中の大事な言葉を見付け出すこと~
 中核教材 『虫は道具をもっている』さわくちたまみ(東京書籍 新しい国語 二下)

実態把握

- ・A児(第3学年・男子)は、下学年適用により第2学年相当の学習を履修している。
- ・伝えたいことをまとめて話すことが苦手なために発表することに自信がもてず、人前で話すことに抵抗がある。
- ・話題が豊富で発想が豊かだが、思いつくままに書く傾向があり、テーマに沿って作文することは苦手である。
- ・問いに対する答えや、文章の中の大切な言葉等、文章を読み取る視点やポイントを明確にすることによって、内容の大体を読み取ることができるようになってきた。
- ・生活の学習では、身近な自然に生きている虫をつかまえて観察したり、図鑑でいろいろな虫の写真や名前を見たりしながら、虫への関心を高めた。



学習環境の整備

- ・虫の体のつくりやはたらきについて、比較的平易な文章や写真・イラストを用いて解説された図鑑や図書を、司書教諭や学校司書と連携して準備する。

2 単元の目標

虫に関心を持ち、図鑑を調べようとしていたり、調べて分かったことを相手意識を持って書こうとしていたりしている。
 (第1学年及び第2学年「国語への関心・意欲・態度」)
 文の続き方に注意しながら、つながりのある文を書くことができる。
 (第1学年及び第2学年「書くこと」ウ)
 文章の中の大事な言葉を見付け、抜き出すことができる。
 (第1学年及び第2学年「読むこと」エ)
 言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付く。
 (第1学年及び第2学年「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」イ(ウ))

3 単元の概要(全9時間)

第一次(2時間)	第二次(4時間)	第三次(3時間)
教師自作の『虫ってすごいぞBook』を紹介し、『虫ってすごいぞBook』作成の意欲を持つ。司書教諭・学校司書と連携し、虫に関する本の紹介を行う。学習計画を立てる。	文章構成(はじめ・なか・おわり)を確認する。 はじめ・なかを読み、虫のすごさを伝えるための大事な言葉を見付ける。 おわりを読み、虫のすごさについて書いた文をもとに意見交流する。	1年生に虫のすごさを伝える文章を書く。 1年生に対して、自分が調べた虫のすごさを伝える。

「並行読書」及び「大好きな虫選定」スタート

4 本時の学習(4/9時間)

- (1) 目標 虫のすごさを伝えるための、文章中の大事な言葉を見付け出す。
 (2) 展開

学習活動	教師の支援と指導上の留意点
<p>1 単元を貫く言語活動(学習課題)と、本時のめあてを確認する。</p> <p>『虫ってすごいぞBook』を作り、1年生に伝えよう</p> <p>みぢかな虫のすごさをみつけよう</p> <p>2 前時の学習を振り返る。</p> <p>前の時間は、カミキリムシの学習をしましたね。カミキリムシのすごいところは、どこでしたか?</p> <p>カミキリムシは、大あごで木にあなを空けることができます。人間が使うドリルと同じはたらきです。</p> <p>そうですね。ドリルはあなを空ける道具でしたね。ところで、カミキリムシのすごさを伝えるための大事な言葉は何でしたか?</p> <p>「虫のなまえ」「すごいぶん」「すごいぶんのできること」「にんげんの道具のたとえ」です。</p> <p>みぢかな虫のすごいところをみつけよう</p> <p>今日は、カミキリムシと同じように、みぢかな虫のすごいところを見付けていきましょう。</p> <p>今日は、ケラ、カマキリ、チョウの勉強をするのですね。</p> <p>3 大事な言葉を見付けながら、教材文を読む。 ・2回音読する。 1回目・・・児童自身が音読する。 2回目・・・教師の範読を聞きながら、大事な言葉を見付ける。</p>	<p>・学習の見通しをもって活動に取り組めるように、本時の活動を確認する。</p> <p>・「単元を貫く言語活動」と「本時のめあて」を列挙して視覚化することで、両者の関連性を意識付けける。</p> <p>・児童が前時に見付けた虫のすごさを確認することで、本時も「すごさ」を見付けて読むことへの意欲付けを図る。</p> <p>・ノートにまとめてある「だいじなことば」を見直すよう促し、黒板にキーワードを示す。</p> <p>【だいじなことば】 「虫のなまえ」 「すごいぶん」 「すごいぶんのできること」 「にんげんの道具のたとえ」</p> <p>言語理解が弱い子どもの支援としては、カミキリムシのすごさを伝える「だいじなことば」を提示する等、モデルを明確にして伝えていくことが大切です。</p> <p>・3種類の虫の写真を用意し、黒板に示すことで、期待感を高める。</p> <p>・特に「すごいぶんのできること」に着目しながら読むように促す。</p>

4 虫のすごさが分かる大事な言葉を見付け、表にまとめる。



本を2回読んで、どんなすごさが分かりましたか。

はい、ケラは土をほる時に、つよくて、かたい前足をつかうことです。

それから、前足は「くまで」のようだと書いてありました。でも、「くまで」がまだよく分かりません。

先生、ケラの前足は「くまで」に似ていると書いてありましたが、形だけですか。



「くまで」の動かし方と、ケラの前足の動かし方の似ているところに目を向けてみましょう。司書の先生がすすめてくださった図鑑でも、「前足」について調べてみてはどうですか。



では、今分かったことをワークシートにまとめます。虫のすごさが分かる体のぶぶんを見付け、をつけてみましょう。

虫のなまえ〔 〕		例
すごさがわかる体のぶぶんを で		
かこみ、できることをかきましょう。		
〔 〕		
そのぶぶんは、どんな道具にしていますか。〔 〕		

5 並行読書して調べている大好きな虫についてのすごさを調べる。



では、今調べている、大好きな虫のすごいところを、教えてください。その虫の「すごいぶぶん」はどこですか。



今、大きなクワガタムシの本をよんでいます。クワガタムシの「すごいぶぶん」は、やっぱり大きなあごです。



分かりました。その大きなあごは、どんな道具にしているのでしょうか。1年生に、そのすごさが伝わるといいですね。

6 学習の振り返りをする。

- ・学習を通して分かったことを話す。
- ・次回は、もっとすごい道具を持っている虫について学習することを。知る。(アメンボ・ハエ・アブ・トンボ・ハチ)

- ・まず、ワークシートの表の書き方を確認する。

言葉を一つのまとまりとして捉えることができるように、区切りを明確にした教材文を拡大コピーして提示する等、児童の主体的な学びを促進する手立てをすることが大切です。

ケラは / つよくて、かたい前足で / 土をほり、かき分けてすすんでいきます。

- ・使い方を確認することができるように、実物の「くまで」を準備しておく。

「デジタル教科書」を使って、虫の静止画や活動の様子を示したり、動作化を通して動きを確認したりしながら説明することで、子ども自身が実感を伴って理解できる手立てを行うことが大切です。

- ・幅広い情報との関連を持つ。
- ・司書教諭・学校司書との連携により、学級のコーナーに図鑑を数種類準備しておく。

授業で学習したことを生かし、現在「並行読書」して調べている大好きな虫についてのすごさが書かれている部分に付箋を貼っていくなど、文章内容の理解を促進する手立てが大切です。

- ・「単元を貫く言語活動」のゴールは、1年生に「虫のすごさ」を伝えるということを再確認する。

- ・学習の振り返りを自分の言葉で話すことで、ねらいを達成したかを見取る。
- ・学習の「ワクワク感」を持つために、次回は人間にはできないことをしている虫のすごさについて学習することを伝える。

(3) 評価規準

文章の中の大事な言葉を見付け出し、表に書いている。

(第1学年及び第2学年 「読むこと」エ)

学習課題を明確にすること

国語科では、子どもが「単元のゴール」を明確に持つことができる「単元を貫く言語活動」を位置付けることが求められます。そのためには、「虫ってすごいぞ Book 作り」のように、交流学习や日常の学習等、これまでに経験してきた活動をもとに学習課題を設定することが大切です。魅力ある学習課題は、子どもの「大好き!」「ここが知りたい!!」という好奇心を引き出し、子どもの主体的な学びを促します。

また、本実践例では、第三次で1年生に「自分が調べた虫のすごさ」を伝える場を設定しています。これにより、子ども自身が相手意識と目的意識を持ち、自分に必要な情報を見付けながら何度も本を通読する等、子どもの主体的な学びを引き出すことができます。

多様・多重な評価に努めること

複数の子どもが在籍している場合には、互いの考えを聞き合うことで、互いのよさやがんばりを認め合い、達成感を味わうこともできます。しかし、ひとりの場合は、教師が子どもの考えや思いを直接聞き取って記録(メモ)を残したり、子どものつばやきや表情の変化等を観察したりして、子どもの思考の深まりを、できるだけ丁寧に見取ることが大切です。それは、子ども自身の「自己評価」を見取る際の手がかりとなるだけでなく、がんばった子どもを称賛する際の材料にもなります。

また、交流する学級や学年からの「肯定的な評価」は、次の学習への意欲につながり、子どもの主体的な学びを生み出す原動力となります。



5 . 実践例 算数 小学校知的障がい学級

1 単元名 重さ

実態把握

- ・ B児（第4学年・女子）は、下学年適用により第3学年相当の学習を履修している。
- ・ 加減乗除の式の記号の意味が分かり、式を読むことはできるが、図と関連させて説明することは苦手である。
- ・ 長さ、かさを定規や計量カップで測定することは知っており、定規の目盛りを読むことは大体できる。
- ・ 身近な単位は知っているが、単位の換算をすることは苦手である。
- ・ 時計は、時々不注意な間違いは見られるが、時刻を読むことは大体できる。
- ・ 学校生活の中で何かと比べて重い、軽いと感ずることを体験しているが、重さに対する量感は十分ではない。
- ・ 言葉を聞いて考えるよりも書かれた文章を見て考える問題の方が得意であるが、細部への注意に課題がある。

学習環境の整備

- ・ 教室に「はかりのコーナー」を設置し、休憩時間等にも身の回りにあるものの重さを量ることができるようにすることで、ものの重さを正しく測定する活動の楽しさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする意欲を育てる。
- ・ 100g、500g 等のおもりを用意し、児童が自由に触れることができるようにすることで、その感覚を味わえるようにする。

2 単元の目標

重さの大きさについて豊かな感覚をもち、重さの単位とその相互の関係、測定に用いる単位や計器の選び方を理解し、重さの加減計算をすることができる。

3 本時の学習（5 / 10時間）

(1) 目標

重さの量感をつかみ、1kgの重さをつくることができる。

(2) 展開

学習活動

1 スーパーで売られている商品（いずれも重さ1kgの小麦粉、砂糖、水）の重さを予想する。



小麦粉、砂糖、水、それぞれの重さがどれくらい分かかりますか？



長さなら大体どれくらい分かるけど、重さはよく分からないわ。



2 本時の課題を知る。



実は、どれも1kgなのです。重さは目で見るのができないので難しいですね。

大体の重さが分かるようになるのかしら。



身の回りのものを使って1kgをつくらう。

3 米を使って1kgの重さをつくる。



まずはお米を使って1kgをつくってみましょう。どのようにしてつくったらよいのでしょうか？

500gを使えばつくれそうだけ。1kgは500g2つ分になるわね。



ここにある小麦粉、砂糖、水を使ってつくったり、確かめたりしてみてもいいですよ。

重すぎたり、軽すぎたりしたら、100gを使って調節すればいいわね。



【手順表】

1kgをつくらう
1kgだと思ってお米をペットボトルに入れる。

はかりで重さをはかる。

ワークシートに記録する。

😊 やりなおしができます。

「できました」と先生に伝える。

【記録用ワークシート】

使ったもの	1回目	2回目	3回目
	g	g	g
使ったもの	1回目	2回目	3回目

教師の支援と指導上の留意点

- ・ 本時の学習の場面を把握しやすくするため、スーパーに置かれている商品を提示して、視覚的に捉えやすくする。
- ・ 重さを予想する活動を通して、重さは不可視的な量で概測が難しいことを実感することで、本時の学習にチャレンジしようという気持ちを引き出す。



児童生徒が意欲をもって学ぶために、まずは児童生徒自身がやること分かり、やり方が分かっているということが必要です。児童生徒の目的意識を明確にするとともに、学習の見通しをもつことができるような働きかけを大切にします。

- ・ 手順表を掲示し、手順を声に出して確認する。目からの情報を得ながら声に出すことにより、音声認識の弱さを補う。
- ・ はかりの目盛り（900g～1100gの範囲）に合格マークをつけておき、この範囲の重さであれば許容範囲であることを知らせる。
- ・ これまで経験している100gや500gの重さと、スーパーで売られている商品の重さを基にして考えることができるようにする。
- ・ 「1kg=1000g」等の既習を教室内の学習コーナーに掲示しておき、児童自身が既習を活かして学ぶことができるようにする。
- ・ 量感を養うために、重さを調節する際には、はかりからペットボトルをはずして行う。



既習の「はかりの使い方」について確認するとともに、はかりの針を記入できるワークシートを用いることで、秤量2kgのはかりの目盛りの読み方について定着を図るようにする等、繰り返しを通して分かる授業づくりを大切にします。

4 「粘土を使って1kgの重さをつくる活動」「身の回りから1kgのものを見付ける活動」を行う。



粘土でも1kgをつくることできるでしょうか？
また、身の回りにあるもので1kgをつくることできるでしょうか。

ランドセルが1kgくらいかな？
教科書とノートを組み合わせてもいいですか？



先生も粘土を使って1kgをつくってみただけで、Bさんのものとはずいぶん形が違いますね。



形や置き方を変えても重さが変わらないか調べてみたいと思います。



- ・繰り返し試行する活動を取り入れることで、確かな量感をはくむとともに、 $1\text{kg} = 1000\text{g}$ ということを経験的に理解し単位換算のつまずきを減らす。
- ・同じ1kgでも様々な形の粘土を用意し、重さの保存性についても目を向けるようにする。

教師が一方向的に指導・支援するのではなく、子どもの意見を聞きながら、教師の考えも同時に伝えていくという応答関係を大切にします。主体的な学習とは、「教える」ことではなく「気付かせる」指導であると言えます。

5 自分で1kgをつくってみて、分かったことや感じたことを発表する。



今日の学習を振り返って、分かったことや感じたことを教えて下さい。

同じ1kgでもいろいろな大きさがあるのね。
粘土は形を変えても重さは変わらないわ。



1kgの重さが大体分かってきたわ。
重さの見当がつけば、どのはかりを使えばいいか分かるわね。



今日の学習できるようになったことを「がんばり日記」に一言書いておきましょう。

家の中にある重さを量る道具やgやkgが記されている商品を探してみよう。

- ・綿でつくった1kgを見せることで、重さは見かけの形や大きさに関係しないことが実感できるようにする。
- ・米でつくった1kg（マイ1kg）を学習後も教室に置いておき、いつでも1kgの量感を確かめることができるようにすることで、重さの見積もりの定着を図る。

児童が交換記録ツール（がんばり日記等）に自分ができるようになったことを書き溜めていくことで自信がもてるようにします。そして、その頑張りや家庭にも伝えることで、保護者の学習内容についての理解を促し、生活との関連を図ったり、多様かつ多重な評価につなげていけます。

- ・日常生活へのひろがりをもてる活動を位置付けることで、学習内容を日常生活の場面で活用しようとする態度を育てる。

(3) 評価規準

- 知っているものの重さをもとに、1kgの重さをつくろうとしている。
- 重さの大きさについての豊かな感覚をもっている。

- (算数への関心・意欲・態度)
- (数量や図形についての知識・理解)

一人一人の教育的ニーズに応じた指導や支援を行うこと

各教科の目標・内容を下学年の教科の目標・内容に替える際には、ただ単に下学年の教科書やドリルを用いればよいということではなく、教材・教具等を工夫し、児童生徒にとって学習しやすく、分かりやすく、理解しやすくする必要があります。本事例においては、児童の聴覚認知の弱さへの手立てとして、操作したり視覚的に捉えたりして学習に取り組める支援を大切にしています。

見る、聞く、触る、嗅ぐ、味わうなど五感を使い、主体的に対象に働きかける具体的な学習活動を行うことは、抽象的な思考を苦手とする子どもにとって有効な学習活動であると言えます。このような体験的な学習を通して、実感を伴った理解を図ることで、積極的に学習に取り組む態度を育てるとともに、学習への意欲を高めることができます。

振り返りの場を設定すること

振り返りの場面で「今日はこんないいことを学習したな」「このことはこれからの学習や日常生活で使えるな」と児童生徒が実感することは、今後の学習や生活の中で見通しをもったり、学ぶことの成就感や達成感を味わったりすることにつながります。

最終的に児童生徒にどのような感想をもってほしいのか、ということイメージしながら授業づくりをしていくことが大切です。

授業のねらいにそった物理的環境を整えること

本単元では、重さの普遍単位（g、kg）について理解すること、目的に応じて単位や計器を適切に選んで効率的に測定できるようになることをねらっています。そして、これらのねらいを達成することが、およその見当をつけ、適切な計画を立てて生活を能率化していこうとする態度の育成にも結び付いていくのです。

重さは、長さのように概測することが難しいので、次の点を意識した環境整備、指導を大切にします。

- * はかりを常備し、量る前に重さを予想し、実測値と比べる機会を多くして、重さの感覚を豊かにする。
- * 身近な物の中で、代表的な重さの量感を身に付けることに努める。
- * 正味の重さが記入された商品で、重さを体感的に捉える。

なお、水1Lは1kgであることを利用して、比重が水に近い牛乳、醤油など、そのかさの示されているものからその重さを捉えたり、これを媒介として重さを概測したりすることも大切です。

5 . 実践例 算数 小学校知的障がい学級

1 単元名 C児：100までのかずのけいさん D児：直方体と立方体

実態把握

- ・C児（第2学年・男子）は、下学年適用により第1学年相当の学習を履修している。
- ・繰り上がりや繰り下がりのない1位数どうしの加法及び減法を正確に計算することができる。
- ・2、5、10ずつと、まとまりを作って数えることはできるが、生活の中で生かすまでには至っていない。
- ・具体物や半具体物を操作しながら自分の考えを説明する学習を積み重ね、発表することに自信をつけてきた。
- ・失敗したくないという気持ちが強く、教師の許可や確認がないまま行動することに不安を感じている。
- ・D児（第6学年・女子）は、下学年適用により第4学年相当の学習を履修している。
- ・はっきりとした色彩のパズルやビーズなどが好きで、最近ではC児の影響でパズルブロックを楽しんでいる。
- ・モデルがあれば立方体や直方体を短時間で作り上げることができる。
- ・図形概念の理解や立体の見えない部分を想像することを苦手としている。
- ・「辺」「面」などの日常生活で使用頻度の低い用語の理解は難しいので、繰り返し学ぶ場の設定が必要である。

学習環境の整備

- ・授業のはじまりと終わり以外は、パーティションで仕切られた個の学習スペースに机を移動し、それぞれの課題に集中して取り組むことができる場を確保する。
- ・ひとり学びの時間に見通しをもって取り組むことができるように、1時間の学習の流れをメニューカードで提示したり、課題解決の手がかりとなる既習の内容や考え方を学習コーナーに掲示したりする。

2 単元の目標

- C児：簡単な場合の2位数の加法及び減法の計算の仕方を考えることができる。 (第1学年「数と計算」)
 D児：直方体や立方体について、構成要素及びそれらの位置関係に着目して観察したり、構成したり、分解したりする活動を通して、図形についての見方を豊かにする。 (第4学年「図形」)

3 本時の学習 (C児：1/7時間 D児：2/9時間)

(1) 目標

- C児：十を単位とした数の見方を使って(何十)+(何十)の計算の仕方を説明することができる。
 D児：直方体や立方体の構成要素について理解することができる。

(2) 展開

C児(第2学年)	教師の動き	D児(第4学年)
<p>学習活動 教師の支援と指導上の留意点(・)</p> <p>1 本時の学習予定を知る。 見通しをもつことができるよう、本時のメニューカードを提示して説明する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>月 日(火)</p> <p>1 もんだい・めあて</p> <p>★ 2 ひとりまなび</p> <p>3 はっぴょう</p> <p>★ 4 れんしゅうもんだい</p> <p>5 ふりかえり</p> </div> <p>2 本時の課題をつかむ。 おりがみ 40まいと 30まいで なんまいですか。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>どうやって考えたらよいでしょうか?</p> </div> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>40と30を「あわせる」からたし算になるな。でも40+30の計算ってしたことがないなあ。</p> </div> </div> <p>・問題場面を把握するための場面絵を掲示する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>数え棒を使って数えてみよう。</p> <p>1,2,3,4..... たくさんあって、大変だな...</p> </div> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>いつも数え棒を使って考えるのも、大変ですね。</p> </div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>はじめてであった40+30のこたえをかんたんにもとめるほうほうをみつけたぞ。</p> </div> <p>・解決の見通しをもって自力解決に向かえるよう、ひとり学びの約束を確認する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>数え棒で大きな数を数える時は、どうすれば簡単にできるでしょうか?</p> </div> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>《めざせ!さんすうはかせ》</p> <p>①これまで がくしゅうしたことをつかってみよう。</p> <p>②こたえの たしかめをしよう。</p> <p>③えやす、ぶろっくなど いろいろなやりかたで やってみよう。</p> <p>④えやす、ぶろっくを つかっ て わかりやすく おはなしてみよう。</p> </div> </div> <p>があっただぞ。</p> <p>3 計算の仕方を考える。 今日は、ノートに絵や図をかくて考えてみましょう。どのように考えたのか、おはなししてみましょう。</p>	<p>教師の動き</p>	<p>学習活動 教師の支援と指導上の留意点(・)</p> <p>1 本時の学習予定を知る。 見通しをもつことができるよう、本時のメニューカードを提示して説明する。</p> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>月 日(火)</p> <p>★ 1 ふく習</p> <p>2 課題 (問題づくり)</p> <p>★ 3 課題 (図形くらべ)</p> <p>4 結果の発表</p> <p>★ 5 図形づくり</p> <p>6 ふり返り</p> </div> <p>ひとりで学習する活動に印(★)をつけて、個の学習の意識づけを図ります。</p> <p>2 前時の復習に取り組む。 ・復習問題(形の仲間分け、面の写し取り等)ごとにまとめた算数ボックスを準備しておき、児童がひとりで課題に取り組むことができるようにする。 ・課題を終えたら教師に知らせるよう伝える。</p> <div style="border: 1px solid blue; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>児童生徒が持っている力を発揮することができ、「ま で頑張ろう」という意欲や集中力が継続する、適度な課題を設定します。そのためには、児童生徒の様子を見取り、量や時間、内容を調整していくことが大切です。</p> </div> <p>3 本時の課題をつかみ、解決に取り組む。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>今日は、3つの形を比べて気付いたことをまとめよう。</p> </div> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>3つとも、昨日の仲間分けで同じグループになった形です。 とは直方体、 は立方体です。</p> </div> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>直方体と立方体について調べよう。</p> </div> <p>課題 構成要素についてたずねる問題をつくる。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>それぞれの形についてたずねる問題がつかれませんか?</p> </div> <div style="border: 1px solid gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>「面の形は、どんな形でしょう?」といった問題がつけられるわね。</p> </div> </div> <p>・問題づくりで戸惑う場合には、 の図形を観察して気付</p>

- ・実際に枚数を数えて確かめることができるように、十の束に分けた実物を準備しておく。
- ・考える手がかりとなる、既習の「10ずつまとめてかぞえる」「10がこで」「は10がこ」を学習コーナーに掲示しておく。

を40個かいていくのは、大変だなあ。

もっと簡単な図にできないかな。

数え棒を10本束にした絵が、使えそうだな。

答えが正しいか、折り紙や数え棒で確かめてみよう。

4 計算の仕方を発表する。

はじめに40枚ありました。30枚あわせませう。40、50、60、70。答えは70まいです。

10とびで数えたのですね。10のまとまりが分かる図に表すことはできませんか？

10のまとまりにして「10のいくつ分」で考えると、40+30のようなたし算の答えも簡単に求めることができますね。

しき $40 + 30 = 70$

とのかず $4 + 3 = 7$

こたえ 70まい

- ・ポイントになる式や数を板書に整理する。
- ・絵と式を関連付けたり、よりよい解決方法を見出したるために、教師が聞き役になって質問する。

1対1の個別学習では、子どもの主体的な学びを引き出すために、教師が子ども役になって疑問を投げかけたり、子どもと一緒に考えたりと、子どもと応答を繰り返しながら学習を展開していくことを大切にします。

- ・学んだことを使ってよりよく解決するよさを実感することができるように、類題を準備しておく。

5 評価問題をやる。

60えんと20えんのおかしをかいませう。あわせて、なんえんですか。

- ・計算の仕方を教師におはなしする時に使う10円の模型を準備しておく。

6 学習の振り返りをする。

- ・今日の学習で分かったことを発表する。
- ・児童のがんばりを大いにほめ、次時の予告をする。

- いたことについてたずねる問題をつくるよう助言する。
- ・見取り図での問題づくりが難しい場合のために、具体物を用意しておく。
- ・学習コーナーに既習の「面」「辺」「頂点」について掲示しておき、用語を用いて問題づくりができるようにする。

課題 面や辺、頂点についての問題をもとに3つの図形について調べる。

3つの図形を見て、つくった問題に答えていきましょう。

【ワークシート例】

	面の数	面の形	辺の数	辺の長さ	頂点の数

- ・問題づくりで角度や表面積の問題等があれば認め、機会を捉えて取り扱う。
- ・実際に長さを測ったり、構成要素を数えたりできるよう具体物を用意しておく。

調べたことを整理した表を見て、共通するところと違うところを見付けましょう。

面の数は、同じになるわね。面の形はどうかしら？

4 調べて分かったことを発表する。

調べて分かったことを発表しましょう。同じところはどこでしたか？

面の数、辺の数、頂点の数は、どの図形も同じでした。

では、違うところはどこですか？

辺の長さが違います。は同じ長さの辺が4本×3組、は同じ長さの辺が4本と8本です。

同じ直方体でも辺の長さには違いがあるのですね。どうして違いが生じるのでしょうか？

立方体はなぜ辺の長さがすべて等しくなるのでしょうか？

- ・正方形や長方形の定義に戻って説明できるよう問いかけを工夫する。
- ・「面」「辺」「頂点」という用語を用いて、簡潔に板書する。
- ・「面」「辺」「頂点」という用語を用いて、具体物を指さしながら説明できるようにする。

5 立方体や直方体をつくる。

いろいろな大きさの長方形や正方形を使って直方体や立方体をつくってみましょう。

- ・必要な形と枚数を判断する様子から本時の学習の成果を見取る。

6 学習の振り返りをする。

- ・今日の学習で分かったことや感想を書いて、発表する。
- ・児童のがんばりを大いにほめ、次時の予告をする。

(3) 評価規準

C児：十のまとまりを使って(何十)+(何十)の計算の仕方を考えている。

(数学的な考え方)

D児：立方体や直方体の構成要素について理解している。

(数量や図形についての知識・理解)

見通しをもって活動できるようにすること

児童生徒が活動の見通しをもつためには、活動の手順・量・時間といった具体的な提示をすることが有効です。個別学習用の課題を、決められた場所から自分でもってきて取り組む、決められた分量ができたなら次の課題に進む、という一連の流れを繰り返し行うことで、手順に従って最後までひとりで課題に取り組む力をはぐくむことができます。そのためには、教師の事前の準備も欠かせません。

しかし、ひとりで全てをやり遂げることは容易ではありません。「分からなくなったら先生に伝えに行く」など、困った時の約束を決め、その約束にしたがって行動することができることも、将来必要とされる力です。教師が先回りをするのではなく、困ったり悩んだりする場面は、子どもにとって時には必要なハードルと捉え、子どもの自立的・主体的な活動を促す手立てや日々の継続した指導を積み重ねていくことが大切です。

学ぶ機会、学び合う機会を増やすこと

複数の子どもを同時に指導する場合、一方が個の学びにならざるを得ません。それぞれの子どもが本時のねらいを達成するために、教師がどの場面で、誰に、どのように指導や支援をするのかを明確にすることが必要です。課題に取り組む子どもは、早く課題を終えたり、集中力が持続しなかったりすることがあります。予め多めに課題を準備したり、短時間でできる課題を組み合わせたりする等の準備をし、「空白の時間」を減らし、子どもの学びを保障することが大切です。



5 . 実践例 学級活動(2) 中学校知的障がい学級

1 題材名 大切な朝食

実態把握

- ・生徒 E (第3学年・男子) は、自分ができることとできないこと、他者との違いを認識することが苦手である。
- ・生徒 F (第2学年・女子) は、話し合いや意見交換の仕方について具体的な指示が必要である。
- ・学級活動(2)(3)の学習には、年間指導計画に沿って取り組んできた。2名とも課題を理解し自己決定することができるが、実現困難な目標を決めようとしたり(生徒 E)自分がすることをすぐに忘れてたり(生徒 F)することがある。

学習環境の整備

- ・事前にとったアンケートの結果や話し合いの視点を提示して生徒の課題意識を高めるために、板書の構造化を図る。
- ・決めた目標を意識し、行動化を促すために、教室に学級活動コーナーを設置し、目標を掲示する。

2 題材の目標

自分の朝食のとり方に課題意識を持ち、自分の朝食は自分でよりよくしようとする態度を養う。

3 本時の学習

- (1) 目標 自分の朝食を振り返り、自分にできることを考え、具体的な行動目標を決定することができる。
- (2) 展開

	生徒の活動	教師の支援と指導上の留意点	
		生徒 E (第3学年)	生徒 F (第2学年)
導入	<p>1 教師から提示された課題を自分の課題として受け止める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝食アンケートの結果をもとに、朝食の摂食状況を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝食アンケートの結果を提示することで課題を焦点化する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを準備し、朝食の摂食状況の課題に気付くための視点を示す。
展開	<p>2 原因を追求し、解決への意識を高める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝食の効果について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒がより強く課題を意識し、改善の必要性を感じることができるように、栄養教諭が情報提供する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容によって、養護教諭、栄養教諭、学校栄養職員、司書教諭などの協力を得て指導するようにします。その場合、事前によく打ち合わせをして、役割を明確にして指導の効果を十分高めることができますようにします。
	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ朝食をきちんと食べることができないのか原因を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ、毎日食べることができないのか、バランスよく食べられないのか、という2つの視点を提示することにより、より具体的な原因を考えることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「話し合いの仕方」の掲示を活用して、今何をしているのかを常に意識できるようにする。